

優秀賞

三十秒の奇跡

千葉県 第二中学校 一年

安藤 遼翔

それは、今年のゴールデンウィークでのできごとである。新幹線で、名古屋の祖母の家に行くために、JR総武線に乗って品川まで行く電車内で、僕の前に赤ちゃんをベビーカーに乗せた女の人が乗ってきて、つり棚にポストンバッグをのせていた。

「この女の人も新幹線で旅行に行くのかな？ 僕と同じだな。」と思いながら、なんとなく見ていた。

案の定、その女の方は東京駅で降りた。僕たちは、乗り換えが楽だという理由で、品川から新幹線に乗るので、東京駅では降りない。女の方は、ほかの乗客のじゃまにならないように、気にしながら降りていった。

ふと、女の方が座っていた席の上を見ると、つり棚に女の方がのせたポストンバッグが残っている。

「あの人が、忘れていった！」

ほかの乗客は誰も気づいていない。というより、そのポストンバッグが女の方の物だと知らないのだ。でも僕は、その女の方がポストンバッグを棚に上げるのを見ていたから、その女の方の物だと知っている。

女の方は気づかずベビーカーを押して、ホームを歩いている。もし気づいても、ベビーカーを押しながら、すばやく電車に取りに戻ってくるのは無理だろうと思った。だからと言って、ベビーカーをホームに置いたまま、女の方だけが取りに戻ったとしても、ドアが閉まってしまう、ベビーカーと赤ちゃんがホームに置きざりになってしまったら大変だ。

発車の音楽が鳴りだした。音楽が終わるまでは、ドアは開いているだろう。

ほんの数秒の間にいろんなことを考えて、とっさに体が動いていた。僕は「バッ」とポストンバッグをつかむと、電車を降り、走りながら女の方の後ろ姿に向かって、

「カバン！ 忘れてますよ！」と叫んだ。

そして、ふり返った女の方の足もとにポストンバッグを置いて、降りたドアのとなりのドアから、すばやく電車に戻った。「間に合った」と安心した瞬間、電車のドアが閉まった。

窓からホームを見ると、さっきの女の方がポストンバッグを持って何か言っている。ドアが閉まってしまう、声は聞こえないけれど、「ありがとう」と言ってくれたのだと思う。僕は、(どういたしまして)と心の中で言いながら、小さく頭を下げた。

もし、ポストンバッグを渡したあと、ドアが閉まってしまう電車に戻れなかったら、僕たち家族は品川で乗る予定の新幹線に乗り遅れるかも知れなかった。間一髪^{かんいっぱつ}で間に合って、本当によかった。

三十秒くらいの間のことだったけれど、僕の中で今までで一番スリリングで、誰かの役に立てたと思えたできごとだった。